

ムスリム同胞団と「特別組織」

古 林 清 一

はじめに

Rif'at al-Sa'id は 1930 年代末から Hasan al-Bannā の死んだ 1949 年までのムスリム同胞団の歴史的時期を「『コーラン』 (muṣḥaf) から『ダイナマイト』 (dināmit) へ」という表現で特徴づけた。この時期の同胞団は当初の宗教団体から武装団体へと変貌していたとするのである [Rif'at al-Sa'id 1977: 121-135]。Al-Sayyid Yūsuf はこの時期の同胞団は市民的団体から疑似軍事的団体へと変質し、愛すること、同胞性、知り合うことによって目的を達成する団体から、力や暴力によって目的を達成する団体に変質したと論じている [Al-Sayyid Yūsuf 1994: 15, 20]。そこで、この小論においては、宗教団体の武装団体化について考察する。

I

まず、力、暴力というものについて同胞団ではどのように考えられていたかから検討していこう。

バンナーは、1939 年 1 月、ムスリム同胞団第 5 回総会で力の問題について論じている。コーラン第 8 章第 60 節「おまえたち、できるかぎりの軍隊と騎馬隊を彼らにたいして準備し、神の敵とお前たちの敵を恐怖におとし入れてやれ」[藤本・伴・池田訳 1970: 196] と預言者ムハンマドのハディース「強い信徒は弱い信徒より勝っている。」を引用しつつ、次のように主張している。

ムスリム同胞団は強くなくてはならない。力 (quwwa) において行動しなくてはならない。しかし、この力には様々な種類があり、序列がある。その第一の等級にあるのは信条 (aḳīda) と信仰 (īmān) の力である。それに統一性 (waḥda) と連帯 (irtibāt) の力が次ぐ。この両者の後に、腕 (sā'id) と武器の力が来る。これがいわゆる、暴力である。このことから、同胞団は力を称えていると見るのは全面的には正しくはない。腕と武器の力が使われ、その時、連絡が絶え、制度が混乱し、信条が弱く、信仰が死につつあるのであれば、その時には、その力の運命は破滅であり、破壊であるだろう。だから、人は力の活用の有益な結果と有害な結果とのバランスを取らなくてはならない [Majmū'a : 135]。

このバンナーの人間観は基本的には、攻撃的人間、強い人間のあり方を肯定し、力の行使の肯定の上に成り立っており、いわゆる「非暴力主義」や「反戦平和主義」の思想ではない。しかし、腕力や武器の力、つまり、暴力は粗野なものに見なされ、第三等級に低く、位置づけられており、力の活用の悪しき結果を避けるべく、厳しく統制されるべきものであった。

ムスリム同胞団の武装団体化において、中心的位置を占めたのは「特別組織」(al-nizām al-khāṣṣ)という組織であった。第二次世界大戦終了直後のころ、ムスリム同胞団全体の構造はどうなっていたのか、その中で「特別組織」の位置づけはどうなっていたかから検討してみよう。同胞団のメンバーたちは、四つのランクに分けられていた。「援助者」(musā'id)、
「同僚」(muntasib)、「活動家」('āmil)、「戦士」(mujāhid)である[Mudh.:193-4]。

このうち、「活動家」と「戦士」のランクが幹部メンバーである。その幹部メンバーたちはいくつかの団体に帰属するが、同胞団全体の構造は精巧な時計のような仕組みになっていた。人々の目に見える部分と見えない部分から成っていた。「家族システム」(nizām al-usar)と「ジャッワラ」(al-jawwāla)という二つの団体は見える部分であり、「特別組織」は見えない部分であった。しかし、これらの組織間でメンバーの移動があり、この二つの部分は密接に結びついていた[EL-Awaisi 2000:221-23]。

まず、「家族システム」から見ると、「活動家」('āmil)ランクの同胞団メンバーから、「家族」(usra, pl. usar)と呼ばれる一定数のメンバーから成る基礎単位が構成される。この「家族」のメンバーは定期的に会合し、メンバーたちは愛(hubb)と友好関係(ṣadāqa)の絆でお互いに結びついていた[Raslān 1990:472-3]。この「家族」のメンバーは相互扶助の絆で深く結びついており、同胞団の基礎的な組織を作り上げていたのである。

「家族」と同じく「活動家」('āmil)ランクの同胞団員によって構成された団体にジャッワラがある。この団体は「特別組織」と混同されることもあるが、この団体は公然組織であり、その活動の特徴は自らの存在を絶えず、誇示し、顕示することにあつた。このジャッワラは自らの制服、旗、歌を持っており、青年たちを引きつけた。さらに、人々に同胞団への「改宗」の布教をしたり、夜、都会の大通りをパレードしたりして活動し、多くの人々の目をひきつけた[Lia 1998:168-72]。

それに対して、隠された部分として、秘密組織としての「特別組織」があつた。この組織の存在そのものは同胞団の幹部ですら少数の者しか知らなかった。そのメンバーたちは同胞団員の最高ランクである「戦士」(mujāhid)に属しており、同胞団員の中では最高のエリートであつた。この「戦士たち」の教育のためにバンナーが書いたテキストが「教育のメッセージ」(Risāla al-Ta'lim)である。

ここでは、同胞団の基本的活動としての「宣教」(da'wa)のあり方が述べられるが、この宣教は有名な三つの発展段階を追って行われる。宣教の第一段階は「告知」(ta'rif)と呼ばれ、その第二段階は「形成」(taqwin)と呼ばれ、第三段階は「達成」(tanfidh)と呼ばれているものである[Mitchell 1969:13-4; 古林 2002:74-5; 古林 2004:8-9]。

このメッセージは第一段階と第二段階との違いを強調している。第一段階の宣教は「一般的」(‘āmm) な性格を持つ。人々に間に一般的思想を広める段階である。宣教を行う手段は説教や指導による有益な施設を設立するかによって行われる。それに対して、第二段階の宣教は、「特殊的」(khāṣṣ) な性格を持つ。ジハードの重荷を背負うために同胞団メンバーの中から、敬虔な人々を選抜することによって行われる。

この両者の組織のあり方を見ると、前者の段階では、誰でも同胞団に入会しようとする者にはこの段階の組織は開かれている。当時、エジプトの各地に広まっていた、同胞団の支部の大部分はこの第一段階の状態にとどまっていた。大衆運動として、理想的イスラームの思想を大衆に広めるといふ同胞団の任務を代表する組織のあり方である。しかし、第二段階になると、宣教の組織への入会はジハードの遂行という、長期間にわたり、責任も多く、困難な課題を遂行することの準備ができていた少数の選ばれた者に限られている。この段階が「形成」(taqwīn) と呼ばれるのは、このエリート集団の形成ということである。

さらに、第一段階にあるメンバーたちには、同胞団の指導部の命令に対する服従は必ずしも義務的ではない。しかし、第二段階にいる少数の者たちに対しては、命令に対する服従は完全に行われなくてはならない。そのスローガンは「命令と服従」(amr wa ṭā‘a) である。つまり、メンバーたちは同胞団指導部の命令には、困難なことにも、容易なことにも、好ましいことにも、忌むべきことにも全てに、直ちに、服従することが課されたのである (Majmū‘a: 362)。

第二段階の団体として、想定されていたのは当初は「大隊」(katā‘ib) であるが、この組織は1943年に消滅しており、以後は「特別組織」が「戦士」クラスを代表する団体となった。この第二段階においては、同胞団の指導部の命令に対するメンバーの服従ということはきわめて重要である。このメッセージでは、「指揮官」(qā‘id) は宣教の一部である。指導なくして宣教はない。同胞団の組織の力、そのプロジェクトの遂行、その目的到達の成功、それが直面する困難の克服という諸課題は指揮官と『兵士たち』(junūd) としてのメンバーたちとの間の相互の信頼関係如何に基づいている。」そして、指揮官には父、師匠、シャイフとしての権利がある。宣教が成功するか否かは同胞団員が指揮官との間にある「絆」(ṣila) を自覚し、指揮官に対する「信頼」(thiqa) を持てるかどうかにかかっている (ibid: 364-5)。

ここでの人間関係のモデルは軍隊にある。指導者と「特別組織」のメンバーとの関係は指揮官と兵士との関係で捉えられ、兵士の指揮官に対する信頼、服従ということが決定的に重要であった。

1946年2月、‘Abd al-Majīd Ḥasan という青年が今まで帰属していたジャッワララの組織から、新たに「特別組織」のメンバーとして選ばれた。彼は二年後には、エジプト首相暗殺事件を引き起こし、一躍、有名となる人物である。彼は、この時、「バイア」(bay‘a) という儀礼を受けた。彼はこの儀礼の行われる暗い部屋に連れて行かれるとそこには、ヴェール

を着用した男がいて、彼はこの男に対して、バイア、つまり、忠誠の誓いを行った。その誓いの際には、若者は「コーラン」(muṣḥaf)と「ピストル」(musaddas)の上に手を置き、その上にヴェールの着用者が手を置いた。このヴェールの着用者はこの二つのものがイスラームの勝利にとって唯一の武器であると言った。そして、この儀式の介添え役の者がこのヴェールの男が、我々と Ḥasan al-Bannā を結びつける「絆」(ṣila)であると説明した。つまり、この儀式によって、同胞団の指導者、バンナーに対する忠誠の誓いが行われたことになる [Al-Sayyid Yūsuf 1994: 39-41]。

このバイアの儀式においては、ジハードの遂行者としての「特別組織」メンバーは同胞団指導部の厳しい統制のもとにおかれ、指揮官への絶対的服従、忠誠の確認が行われている。

バンナーは大戦中から密かに武器を集めていたが、大戦後のエジプトでは同胞団はパレスチナ支援の名の下に公然と武器を集め、そこへ義勇軍を派遣する準備をしていた [Mitchell 1969: 26; Rif'at al-Sa'īd 1977: 134]。

さらに「特別組織」のメンバーに対する軍事訓練も強化された。ナセルたちの「自由将校団」の職業軍人たちのグループがこの時期、同胞団に接近していた。1946年のはじめ、この将校たちは暗い部屋でコーランとピストルの上に手を置いて、ヴェールを着用した男に対して忠誠の誓いを行った。その後、この将校たちは同胞団員たちに対して、軍事訓練を行った。この訓練はヘルワーンの砂漠、カイロの al-Muqāṭṭam 山、シャルキーヤ県、イスマーイリーヤ県で行われた。この訓練においてはピストル、鉄砲、自動小銃、手榴弾などの訓練が行われた。1946年と1947年の訓練の担当者はナセルだった。'Abd al-Majīd Ḥasan もこの頃、軍事訓練を受けた [Al-Sayyid Yūsuf 1994: 48-51]。

「特別組織」という疑似軍事組織を支えるイデオロギーはジハードという思想であり、1930年代の末にパレスチナ情勢の緊迫と共に、バンナーによって打ち出された。彼は神の名の下に死ぬことを栄光化した。「ジハード論」の末尾で彼は言っている。「高貴な死に向かって行動せよ。汝は完全なる幸福を得るであろう。神の道において、殉教の名譽を我々と汝に与えたまえ [Majmū'a: 437]。」

たしかに「ジハード」論はこの時期に形成されていたが、しかしながら、完成されたものではなかったということである。バンナーにとっては、ジハードは長く続く、困難なプロセスであると捉えられ、今は待機の時であると捉えられていたようである。革命や軍事行動のようなことを今行うべきであるとは考えられていなかったように思われる。

バンナーは「特別組織」という疑似軍事組織を作り上げた。しかし、この組織が1942-3年頃、創設されて以来、約5年間、その組織の軍事行動は行われていない。このことは彼の指揮下にあった「特別組織」に対する彼の統制の強さによるものであろう。もう一つの背景として、エジプト政府と同胞団との友好関係によるものであろう。

1923年憲法体制下の立憲政治、議会政治のシステムのもとでは殆どの選挙はワフド党が勝利したが、1923-50年の間に成立した17内閣のうち、ワフド党内閣は5にすぎない。大

部分の内閣は選挙結果を無視した宮廷派の保守政党系の内閣であった。大戦前、30年代末から40年代初めにかけて、同胞団が急速に発展した背後には、宮廷派の有力政治家、'Alī Māhirのパトロネージに組み込まれ、保護を受けたという事情があった [Lia1998: 214-23; 古林 2008: 71]。大戦後においても、1946年には、同胞団は Ismā'il Sīdqi 内閣からは同胞団の新聞、al-Ikhwān al-Muslimūn を日刊新聞にすることを許可を得た。他方、この年、5-6月に起こった、織物労働者たちの大規模なストライキに対しては、同胞団はストライキに反対し、スト破りを行い、政府に協力した [Beinin & Lockman 1987: 370-72]。最後には、政府と同胞団との悲劇的対立にいたる、al-Nuqrāshī 内閣に対しても、1947年夏頃までは、同胞団はこの政府を支持しており、その代表がニューヨークまで出向き、国連安全保障理事会でこの政府の外交政策の支援キャンペーンを行っていた [Mitchell 1969: 50-1]。

バンナーらの同胞団指導部の政治的立場は同胞団の武装化は推進しつつも、武力の発動にはどこまでも、慎重であった。たしかに、1941年、同胞団は政府の弾圧を受けたものの、政府権力とは決定的対立を避け、政府側の政治的コントロールの枠組みの内部にとどまっていた。少なくとも、1947年頃までは、このような立場が維持されていた。

II

Rif'at al-Sa'īd はこの保守政党の政府と同胞団との関係をアラブの民話のたとえで説明している。保守的政治家たちは、ワフド党や労働組合のような左派勢力を抑えるために、「びん」(qumqum) を手でこすって、「叛徒」(mārid) を自由に呼び出して利用していた。この「叛徒」は同胞団を指している。ところが、この「叛徒」は宗教団体として強力になり、武装化を行うにつれ次第に手に負えなくなった。元来は主人であった、保守勢力の政府がもとは操り人形でしかなかった、同胞団に次第に恐怖を感じるようになった。これが1940年代末の状況だと言うのである [Rif'at al-Sa'īd 1977: 138]。

この両者の関係を変えたのが、政治と暴力との結びつきの問題である。1923年憲法体制下では、複数政党の中から民意に基づいた政党が選挙によって選出され、平和裡に政権交代が行われるという政治システムは成立しなかった。大戦後の時期には、政治的不満が生じると、政治的リーダーの打倒を、暴力、暗殺という非民主的な手段によって行うということが広まった。「ろくに反応しない『投票用紙』(ballot) に『銃弾』(bullet) が取って代わることになったのである」 [Mitchell 1969: 314-6]。政治的正義の実現のためには暴力を用いることを辞さないという雰囲気がエジプト人の間に広まっていたのである。

それまで封印されてきた、「特別組織」の軍事行動は意外な形で始まった。それは「指揮官」としてのバンナーの命令によるのではなく、若い「兵士」たちの跳ね上がり行動によって始まった。

創設以来、ほぼ5年を経た、1947-8年に、エジプトでの「特別組織」の活動が始まった。

それはアレクサンドリアで1947年のクリスマスの夜、英軍のキャンプに彼らが爆弾を投げ込むことによって始まった。この行為を行った青年たちは捕らえられ、裁判官 Ahmad al-Khāzindār は10年間の投獄の判決を出した。彼はその後、カイロに転勤し、ここでも英軍兵士たちに爆弾を投げた同胞団の青年たち二名に対して、三年間と五年間の投獄の判決を下した。これらの判決のため、彼は同胞団の怒りを買って、1948年3月22日、同胞団の二人の学生によって暗殺された。[Al-Sayyid Yūsuf 1994: 75, 83]。

この暗殺事件以後、同胞団のテロリズムが本格的に進行することになる。12月8日、政府はムスリム同胞団が行ってきた様々のテロ行為を非難し、その解散を命令した。政府の解散命令に対して、12月28日に同胞団の「特別組織」のメンバー、'Abd al-Majid Ḥasan が al-Nuqrāshī 首相をピストルで暗殺した。この時、彼は獣医学部の23才の学生であった。

この1948年に生じた二つの暗殺事件の背後で何が起こっていたのだろうか、まず、イデオロギー面では重大な変貌が生じた。ハージンダール判事の殺害はジハードであると見なされた。このジハードの遂行はムスリムにとっては義務である。この判事は同胞団から見ると、「犯罪」(jurm)を犯したからだ。何故なら、彼はイスラームの敵である、英国人たちのグループに敵対した、ムスリムの青年を投獄したからだ [Rif'at al-Sa'id 1977: 140-1]。この考えでは、たとえ、ムスリムであっても、「不信仰」(kufr)の疑いが生じた者はジハードの名のもとに殺害が認められるとするものだ。この考えは先に述べた、バンナーのジハード論の枠組みからはみ出たものである。

同様に、スクラーシー首相の暗殺者である、'Abd al-Majid Ḥasan は「特別組織」のメンバーとなった後、ジハードの問題について、指導部から受けた教育について証言している。当初、教えられたのは、この組織のメンバーたちはパレスチナへ派遣され、義勇軍として戦うために、武器の使用の訓練が行われるのだということだった。ジハードの時がやがて来るのだと同胞団の指導部は言っていた。ところが、指導部は彼らのパレスチナ派遣ということをしだいに、遅らせるようになった。そして、ジハードの行われる場所はパレスチナに限られない、エジプトもジハードの行われる舞台たりうると告げられた。そして、ジハードの対象者は当初は非ムスリムを想定していた。ところが、敵を助けていることがはっきりとした、裏切り者のムスリムを殺すことはムハンマドの時代にシャリーアで認められていると教えられるようになった。これは「特別組織」が裏切り者のムスリムを殺すことが認められているということだった。裏切り者のムスリムを殺すことは殺人者が天国に入ることで報われるジハードとなったのである [Al-Sayyid Yūsuf 1994: 53-5]。

この時期、恐らく、1948年後半期には、パレスチナ情勢がアラブ側から見て、てづまり状態になると、ジハードのとらえ方が、この組織の指導部のレベルで変貌したことを示している。「特別組織」のメンバーの間では、ジハードの舞台、ジハードの対象者の把握のあり方において変化が起こりつつあり、ジハードの意味が裏切り者のムスリムを暗殺することへと変容しつつあったことがわかる。この新しいジハード論はバンナーのものであるよりは、

後の「ジハード団」などのジハード論に近い [大塚 2000: 206-212]。

ついで、同胞団組織の内部で何が起こっていたかを見ていこう。この当時、政府の治安長官、Murtaḍā al-Marāghī は次のように言った。「この『叛徒』(mārid) の組織、つまり『特別組織』が爆発をおこし、『びん』(qumqum) から飛び出した後で、同胞団の指導部は、もとに戻すことは最早、できなくなった。同胞団の最高機関はこの組織に対して力を失った。シャイフ・アル・バンナーはこの『秘密装置』に対して力がなく、統制できなくなった [Al-Sayyid Yūsuf 1994; p. 91]。」つまり、「びん」から「叛徒」が飛び出すということ、すなわち、政治秩序が崩壊することは、二重の結果を生んだ。エジプト政府の同胞団に対する操作が不可能になった。同時に、同胞団指導部は「特別組織」に対してコントロールを失ったということだ。

テロリズムの横行と共に、同胞団の内部では一種の「下剋上」現象が生じていた。ハージンドール判事の暗殺に関しては、「特別組織」の有力幹部である、'Abd al-Raḥmān al-Sanadī が総導師バンナーの承認を得ることなく、独断で決定し、この組織のメンバーに決行を命じたのであった。この後、この al-Sanadī は同胞団の行うテロリズム行為を指揮し、この組織の実権を掌握した。同胞団幹部、Munir al-Dilla の後世の証言では、バンナーはこの事件以後、若干の同胞団員の「逸脱」、彼らの統制がきかなくなったことを嘆いた [ibid.: 84, 93]。

ヌクラシー暗殺に関しては、その支持者たちはその葬儀にあたっては、「ハサン・アル・バンナーに死を」と叫んだ。しかし、バンナーは犯人の 'Abd al-Majid Ḥasan という若者は知らないと言い、この事件への関与を否定している。むしろ、「特別組織」の下級リーダーであった、Aḥmad Fu'ād や Muḥammad Mālik などがこの暗殺計画を立て、犯人に実行をそそのかしたことは確認されている。[Mitchell 1969: 74; Al-Sayyid Yūsuf 1994: 99-100]。

バンナーのヌクラシー暗殺後の行動を見ると、彼はヌクラシーの後継者、Ibrahim 'Abd al-Ḥādī の内閣に接近し、政府との間で妥協点を探ろうとした。それは長年にわたってバンナーが取ってきた路線の再開であった。彼は新首相との面会を求めて断られたが、その国務大臣、Muṣṭafā Mar'ī と長年の友人で「ムスリム青年協会」の総裁、Ṣāriḥ Ḥarb との間で交渉に入った。この交渉において、バンナーはこの暗殺事件には、同胞団は関わっていないこと、テロリズムには反対であると主張した。すると、そのことを宣言して発表することを政府側から求められ、1949年1月11日の新聞に Bayān li'l-nās (人々への宣言) と題されたバンナーの論説が発表された。そこで、この事件の犯人たちは「ムスリム同胞団員でもないし、ムスリムでもない」と宣言した [Mitchell 1969: 68-9]。

この交渉に当たっては、バンナーの方は、逮捕された同胞団幹部の釈放を求め、同胞団の解散命令を政府が撤回し、同胞団組織の再建を許可することを求めている。しかし、この双方の交渉はそれぞれの陣営の内部での強硬派の不満をかき立てただけであった。まず、1月13日、警察によって同胞団関係の押収された資料が保存されていた、エジプト上訴裁判所の焼き討ちを「特別組織」のメンバーが企てた [Rif'at al-Sa'id 1977: 150-152]。この事件

によって、双方の交渉は暗礁に乗り上げた。そして最後に、2月12日、政府の秘密警察によって、バンナーが「ムスリム青年協会」を訪れた際に暗殺されたのであった。このバンナーの行動は同胞団の内部での彼の孤立を強めただけであった。

他方、'Abd al-Majid Hasan は逮捕後、3週間に及ぶ過酷な拷問に耐えた。この持続力は暗い部屋で行った「バイア」から出てくるものであった。シャイフに対する信頼があつてこそ同胞団の結束力は保たれていたのである [ibid.: 145-6]。彼からすれば、首相暗殺という行為はリーダーとしてのバンナーの了解、命令に基づく行為であった。彼は自分たちを「同胞団員でもなく、ムスリムでもない」と非難するバンナーの「人々への宣言」に強い衝撃を受けた。「特別組織」で受けてきた教育を想起しつつ、次のように疑問を呈している。バンナーはこの組織の「指揮官」(qā'id)であり、この組織の内部で行われることは、全てのことを承認することができる。この暗殺事件の全てについてまず、第一に責任があるのは、バンナー自身ではないかということである。この宣言は他の獄中にある同胞団メンバーの間にも不安をかき立てた [Al-Sayyid Yūsuf 1994: 99, 101]。たしかに、最後にリーダーとしてのバンナーが政治的責任を取らないのであれば、「教育のメッセージ」で幹部同胞団員たちに、何故、指導部に対する絶対服従を説いたのであろうか。指導部に対する服従は「指揮官」に対する「兵士」の信頼に基づくものであるからだ。

このような結末は当初、バンナーの目指した目的、つまり、同胞団の最良の部分によって構成され、指導部に絶対的忠誠を誓う規律ある軍事組織というものは達成されなかったことを物語っている。むしろ、暴力現象の横行によって、この小論の冒頭で見た、力の行使の悪しき結果、同胞団の指導部と末端のメンバー間で相互不信の広まりという破滅的運命の到来を示しているようだ。

結びに代えて

バンナーの後継者、Al-Hudaibi はテロリズムを否定し、1953年11月に、'Abd al-Rahmān al-Sanadī らの「特別組織」の古参幹部たちを同胞団から除名した。しかし、1954年には、彼は同胞団員に対する統制力を失い、同胞団の最高指導者としての自信を完全に失い、雲隠れする始末であった。その間隙を縫って、「特別組織」の新リーダーの庇護のもとで、'Abd al-Ra'ūf らの急進主義者たちがナセル首相暗殺計画を立案し、Maḥmūd 'Abd al-Laṭīf に決行を命じた。この狙撃者はジハードの名の下に首相の暗殺を企てることとなった。この暗殺計画においても、同胞団の指導部のコントロールは全くきかなかつた [Mitchell 1969: 121-2, 138, 148-158; Rif'at al-Sa'id 1977: 132]。

たしかに、バンナーの死をイスラームの敵との戦いにおける「殉教」として美化して捉える評価がムスリムの学者の間には存在する [Ushama 2005: 225]。「特別組織」が行ったテロリズムに対してはバンナーもフダイビーも基本的には反対の立場であった。それでは、彼ら

は同胞団のテロリズムに責任はないと言えるであろうか。しかし、同胞団運動は単なる思想運動、イデオロギー運動ではなくて、政治運動になっていたことを考慮すべきである。政治的行為者は思想のような、その「動機」レベルで善悪が評価されるだけでなく、その行動の「結果」責任で評価されるべきである。「暴力装置」を創設しつつも、その統制力を喪失し、暴力の横行を許したことは政治的無責任の極みではないのか。

参 考 文 献

- Majmū'a : Al-Bannā, Ḥasan *Majmū'a al-Rasā'il li'l-Imām al-Shahīd Ḥasan al-Bannā*, Dār al-Ḥaḍāra al-Islāmiyya, n. d., Beirut.
- Mudh. : Al-Bannā, Ḥasan *al-Mudhakkirāt al-Da'wa wa'l-Dā'iya*, Dār al-Shihāb, n. d., Cairo.
- El-Awaisi, Abd al-Fattah M. (2000) *Jhādīa Education and the Society of the Egyptian Muslim Brothers : 1928-49*, *Journal of Beliefs & Values* 21 (2), 213-225.
- Beinin, J. & Lockman, Z. (1987) *Workers on the Nile, Nationalism, Communism, Islam and the Egyptian Working Class, 1882-1954*, Princeton.
- Lia, B. (1998) *The Society of the Muslim Brothers in Egypt, The Rise of an Islamic Mass Movement 1928-1942*, Reading.
- Mitchell, P. M. (1969) *The Society of the Muslim Brothers*, Oxford.
- Raslān, 'Uth. (1990) *Al-Tarbiya al-Siyāsiyya 'inda Jamā'a al-Ikhwān al-Muslimīn fi'l-Fatra min 1928-1954 fi Miṣr*, Cairo.
- Rif'at al-Sa'id, (1977) *Ḥasan al-Bannā : Matā, Kaifa wa li-Mādhā?*, Cairo.
- Al-Sayyid Yusuf. (1994) *Al-Ikhwān al-Muslimūn ; Hal Hiya Ṣaḥwa Islāmiyya?*, vol. 3, *al-Jamā'a wa'l-'Unf*, Cairo.
- Ushama, Th. (2005) Hasan al-Bannā's Life, Mission, Political Thought and Reforms. In : Zeenath Kausar (ed) *Contemporary Islamic Political Thought : A Study of Eleven Islamic Thinkers*, Kuala Lumpur.
- 大塚和夫 (2000) 『近代・イスラームの人類学』東京大学出版会.
- 古林清一 (2002) 1930年代におけるムスリム同胞団『西南アジア研究』57, 67-79.
- 古林清一 (2004) ハサン・アル・バンナーの思想 —— 宣教と政治をめぐる —— 『国際文化』5, 1-22.
- 古林清一 (2008) 歴史の中のムスリム同胞団『アラブ・イスラム研究』6, 63-74.
- 藤本勝次・伴康哉・池田修訳 (1970) 『コーラン』中央公論社.